

【資料紹介】滑石製石鍋の年代

—長崎県大村市竹松遺跡の調査成果から—

古門 雅高

はじめに

長崎県は古代末から中世にかけて、北海道を除く日本各地に流通した滑石製石鍋の一大生産地であった。しかし滑石製石鍋が採掘・生産された場所が、かつて「陸の孤島」と言われた西彼杵半島の奥深い山中にあったことから、一般には注目されることなく、今もひっそりと当時の面影を残したままで存在している。したがって研究者や歴史愛好家の間では広く知られているものの、長崎県民ですらその存在や歴史的価値を認識していないというきわめて残念な現状があることもまた事実である。

さらに、生産地であるがゆえに採掘された場所や採掘痕跡を遺す露頭などの遺構は多いものの、消費地としての遺跡や遺構の発見に恵まれず、生産地に最も近い消費地でありながら、消費実態が不明で、他の消費地との比較研究が進まないという現状もある。

そのような状況のなか、九州新幹線西九州ルート建設に伴う大村市竹松遺跡の緊急発掘調査では、大量の滑石製石鍋片の資料とともに、古代末から中世にかけての集落跡の調査に恵まれた。同遺跡の調査報告書は既に刊行されており、調査成果に基づく滑石製石鍋研究も少しずつ公にされている（註1）。

本稿は、生産地に最も近い消費地のひとつである竹松遺跡の調査成果に照らして、これまでも学会で様々な議論されてきた滑石製石鍋の出現時期を検討したものである。

1 滑石製石鍋の編年研究史

竹松遺跡の滑石製石鍋を検討する前に滑石製石鍋の研究史を概観するが、本稿の目的が竹松遺跡出土の滑石製石鍋の各型式の出現と消滅時期を検討するため、滑石製石鍋研究のうち型式分類と編年の研究に絞り、地域も九州に限定した上で行う。取り上げるのは九州における滑石製石鍋の代表的研究とも言うべき森田 勉、杉原敏之、徳永貞紹各氏の研究と耳付石鍋の消滅時期を検討した松尾秀昭氏の研究である。

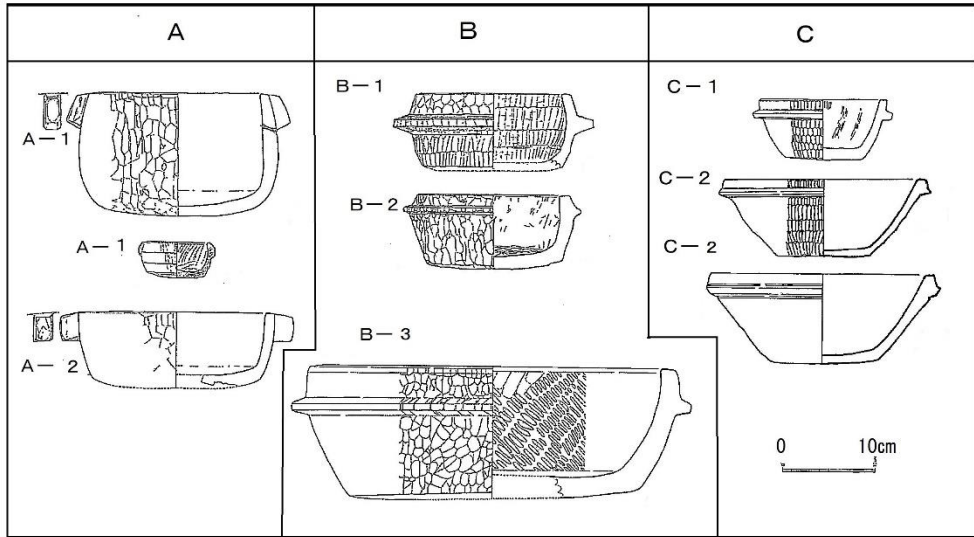
(1) 森田 勉の編年研究（森田 1983）

①型式分類（第1図）

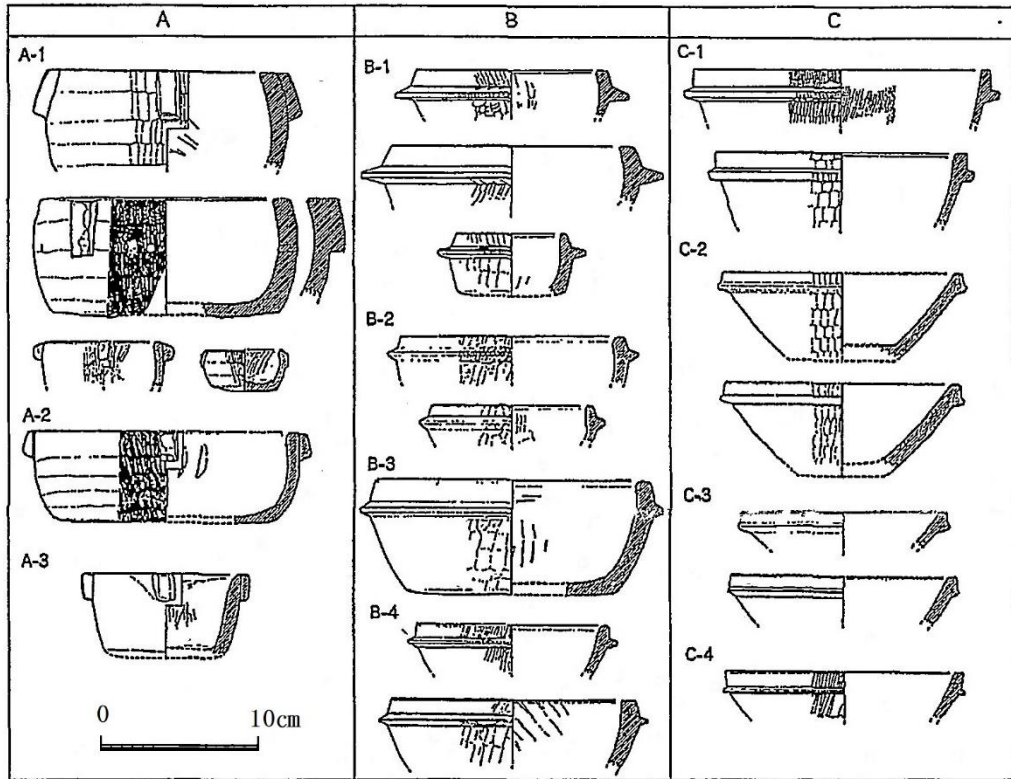
森田は滑石製石鍋を方形の耳をもつA群と鐔付きのB群、さらに体部を外上方へ直線的に立ち上がらせるC群に分類した。

A群は体部の張り出し方により内傾・内彎するA-1と直線的に立ち上がるA-2に細分し、B群も体部の特徴から内彎するB-1と直立するB-2に細分した。さらに両者に比して底径が小さく、次のC群と類似するものをB-3とした。

C群は口径と底径の割合によって、その割合が1/2以上ものをC-1、その割合が1/2ほどであるものをC-2に細分した。



第1図 森田による滑石製石鍋の型式分類（森田 1983 を改変）



第2図 杉原による滑石製石鍋の型式分類（杉原 2007 一部改変）

②型式組列

森田はA群、C群の型式組列を明示していないが、B群についてはB-1、B-2よりもB-3が後出するとしている。

③編年

さらに森田は以下のような編年を提示した。

(ア) A群は9世紀末頃には出現し(註2)、10、11世紀と続く。

(イ) B群の出現期については明らかでない。

(ウ) B-1・B-2は11世紀後半頃には確実に出現し、12、13世紀まで生産・消費されている。

(エ) B-3はB-1・B-2よりも遅れて出現し、13世紀後半頃まで出土する。

(オ) C-1は13世紀後半代には出現している。

(カ) C-2は室町時代前期には存在しているようで15世紀後半頃まで消費されている。

(2) 杉原敏之の編年研究(杉原2007)

森田 勉の編年研究を継承発展させたのが杉原敏之である。杉原は大宰府観世音寺より出土した滑石製石鍋を用いて型式分類と編年を行った。

①型式分類(第2図)

杉原のA群はA-1、A-2ともに森田の型式分類をほぼ踏襲し、新たにA-3を追加している。B群はB-1、B-2、B-3ともに森田の型式分類をほぼ踏襲し、新たにB-4を追加している。C群はC-1、C-2ともに森田の型式分類をほぼ踏襲し、新たにC-3、C-4を追加している。

②型式組列(第3図)

杉原自身が論及中に述べているように「観世音寺出土石鍋の多くは廃棄、あるいは二次堆積資料であり、単純に「時間尺」と整合するものではない」ため(杉原2007 p.135)、特にA群の型式組列の提示までには至っていない。ただし、「体部中位まで垂下する方形把手」は「新しい段階に置くことができよう」と述べており、把手が長いタイプは後出すとの認識を示している(杉原前掲同頁)。

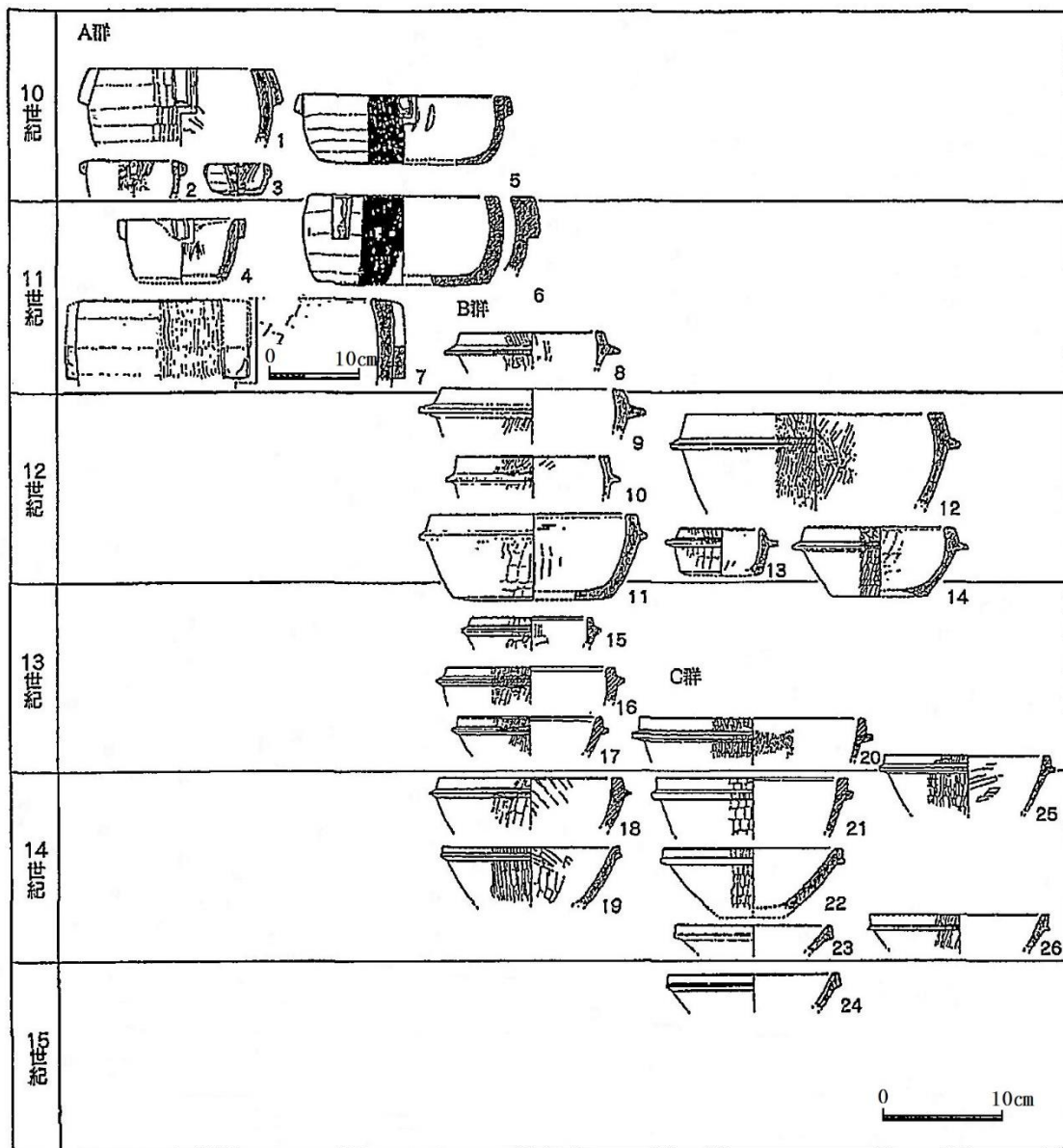
次にB群の型式組列は、古い時期のものは肥厚し内傾する口縁部に大きく張り出す鏝に特徴があり(第3図の8・9・13)、この点が12世紀を通したB群の大きな特徴となっている。13世紀に入り、口縁部は矮小化し、直立気味であるB-2(第3図の15・16)となり、13世紀後半には体部下位から底部へ丸みを持ちながら底径が小さくなるB-4(第3図の17・18)へと移行するとしている。

C群は「直線的に開く体部と直立気味で肥厚した口縁、断面台形の鏝に特徴がある」C-1(第3図の20・21)が古く、次に「短い口縁部と僅かな台形上状の鏝を留め、口径の2分の1以下の底径となるC-2(第3図の22)が続く。次に「さらに体部が大きく開き鏝部が退化したC-3(第3図の23)から細く鋭い鏝を持つC-4(第3図の24)へ移行する」という。

③編年(第3図)

杉原の滑石製石鍋の編年は第3図に示したとおりであるが、杉原自身「編年図」ではなく「変遷図」とキャプションを付している。やはりA群の編年が資料的制約から不安定であるためであろう。

A群の実年代はいずれも整地層ないし溝出土資料であるため、時間的上限を示すことができないとして、海の中道遺跡出土資料を参考に上限を10世紀とし、11世紀後半を下限としている。B群はB-1の上限である11世紀後半で、下限はB-4の14世紀頃と見ている。C群はC-1が13



第3図 杉原による滑石製石鍋の変遷図(杉原2007) 一部改変


世紀後半、そしてC-2, C-3へと型式変化を遂げ、下限を14世紀から15世紀に設定している。

(3) 徳永貞紹の編年研究(徳永2010)(第4図)

徳永は、九州に限らず、全国的な視野に立って、滑石製石鍋の研究史を整理し、特に出現期の滑石製石鍋の型式分類と型式組列ならびに編年を提示した。

①型式分類(第4図)

徳永は平安時代に用いられた滑石製石鍋を「初期滑石製石鍋」と称し、滑石製石鍋の型式変化が最も顕著に表れる属性は耳の形状にあるとして、「張耳型」と「長耳型」を設定し、その中間型式として「小耳型」を設定した。さらに張耳型に先行して「出現期の石鍋」を抽出している(註3)。なお「初期滑石製石鍋」の名称は本稿でも用いることにする。

出現段階	張耳型	小耳型	長耳型	鏝付
原遺跡 博多遺跡基層層3次 徳永遺跡	大宰府史跡14次 海の中道遺跡3次 海の中道遺跡3次	海の中道遺跡3次	木舟の森遺跡2次 八咫遺跡 大江北遺跡 博多遺跡群80次	博多遺跡群79次 

第4図 徳永による滑石製石鍋の型式分類（徳永 2010 より作成）

②型式組列

徳永は自ら設定した4つの型式が「出現期の石鍋」→「張耳型」→「小耳型」→「長耳型」→「鏝付石鍋」と変化することを提唱した（徳永前掲）。

③編年

徳永の論拠は結果的に森田・杉原のA群の編年に再考を促すことになった。徳永によると出現期の石鍋は「遅くとも9世紀末～10世紀前葉には出現し、初現は9世紀後半に遡る可能性が高い」とし（徳永 2010 p. 728）、9世紀末とする森田や10世紀とする杉原より早い出現時期を考える。

また「張耳型」は9世紀後半から10世紀代を中心とする時期であることや、「長耳型」のうち体部中位まで及ぶ大きな縦長の耳が付くものは「11世紀後葉から12世紀中葉に比定される。」とする（徳永前掲 p. 730）。さらに「耳付石鍋は12世紀後葉には消滅する」と述べている（徳永前掲 p. 719）。

④「出現期の石鍋」の分布

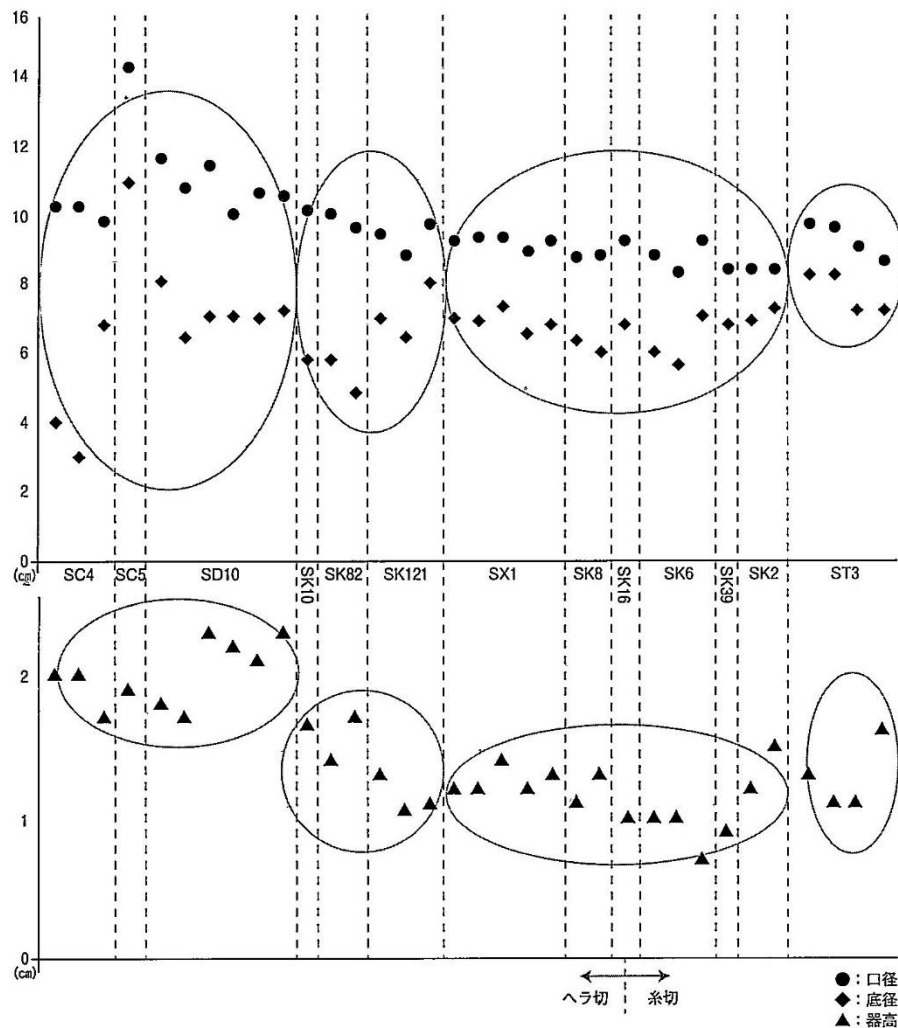
徳永が指摘した「出現期の石鍋」は、後続する石鍋の型式と比べて耳の形態が変化に富んでいる点が特徴であるが、「大宰府から福岡平野周辺の沿岸地域を中心とする狭い範囲」に分布するとも述べており（徳永前掲 p. 728）、その分布もまた特徴的である。

⑤鏝付石鍋について

一方、徳永は耳付石鍋に後続する鏝付石鍋の出現時期についても研究史を整理している。徳永によると鏝付石鍋の出現時期は森田勉の11世紀後半頃説、木戸雅寿の12世紀初頭説、杉原敏之の12世紀前半説（可能性として11世紀後半）の各学説に分かれるという。しかし、鏝付石鍋の出現時期と出現過程には「再検討の必要がある。」と述べ、「12世紀前半には出現していることが確認できるが、12世紀初頭にまで遡るかどうかは不明」としている（徳永前掲 p. 730）。

⑥耳付石鍋の消滅

さらに徳永は耳付石鍋の消滅に関連して、「鏝付石鍋が主体を占めるようになって耳付石鍋が消滅するのは、おおむね12世紀後葉であり、耳付石鍋の下限はこれまで考えられてきたよりもやや降ると言えよう。」として（徳永 2010 p. 730）、耳付石鍋（森田・杉原分類のA群）の下限を11世紀代、地域によっては12世紀前半と考える杉原とは異なる見解を示している。



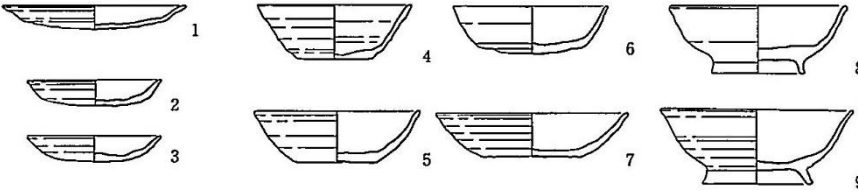
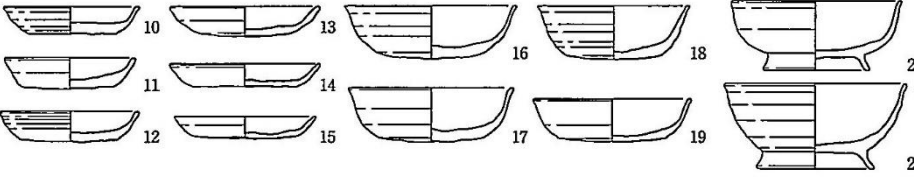
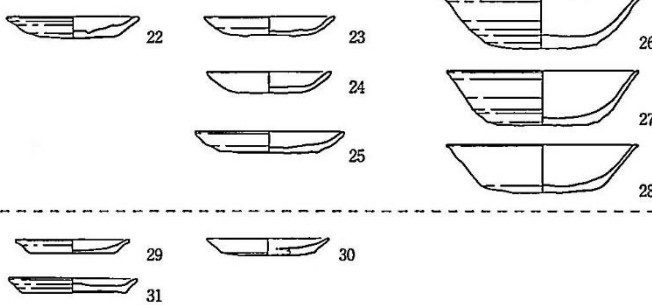
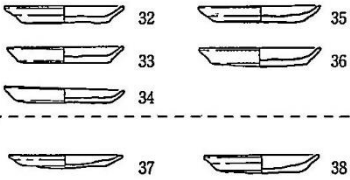
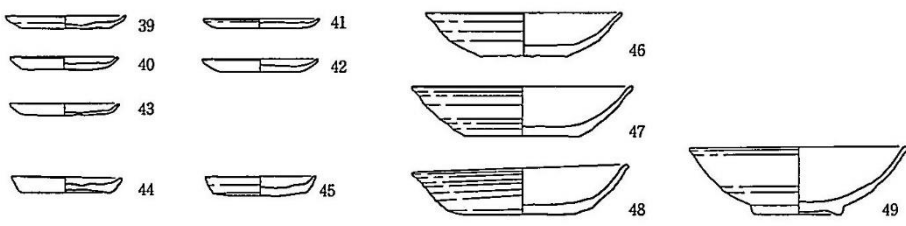
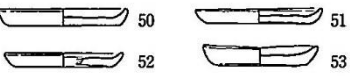
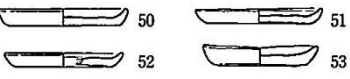
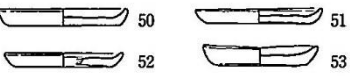
第5図 柴田による土師器小皿法量比較図 (柴田 2019)

(4) 松尾秀昭による耳付石鍋の消滅時期の研究 (松尾 2011)

松尾は長崎県内の石鍋出土遺跡の中から、主要遺跡である楼楷田 (ろうかいた) 遺跡 (松浦市)、岡遺跡・白井川遺跡 (東彼杵町)、伊木力遺跡 (諫早市)、門前遺跡 (佐世保市) を選び各遺跡の石鍋の出土状況を検討した。その結果、門前遺跡では耳付石鍋しか出土しないことに着目し、同遺跡の存続期間が 11 世紀後半から 12 世紀中頃であることから「少なくとも 12 世紀中頃までは縦耳付石鍋のみが流通しており (中略) 12 世紀後半頃まで流通したと考えられる。」と結論付けた (松尾前掲 p. 189)

(5) 滑石製石鍋の編年研究の現状と課題

以上のように九州における滑石製石鍋の編年研究を概観すると、鏝付石鍋に先行する耳付石鍋 (森田・杉原分類の A 群) は、徳永によって森田・杉原説よりも初現は古く 9 世紀後半、消滅は新しく 12 世紀後葉という編年案が示される一方、松尾によって耳付石鍋の消滅時期に関して徳永説よりさらに新しい 13 世紀前後とする見解が示されている。

	10C 中頃	1期
	10C 後半 ～ 11C 初頭	
	11C 中頃	2期
	11C 後半	
	12C 初頭	3期
	12C 中頃	
	12C 後半	4期
	13C 前半	

2～3：小皿Ⅰ-1類、10～12：小皿Ⅰ-2類、13～15：小皿Ⅰ-3類、22～25：小皿Ⅱ-1類、32～38：小皿Ⅱ-2類、
39～43：小皿Ⅱ-3類、50～53：小皿Ⅲ類
4～6：坏Ⅰ-1類、16～18：坏Ⅰ-2類、26～28：坏Ⅱ類、47～48：坏Ⅲ類、46：豊前型土師器坏

第6図 柴田による土師器編年（柴田 2019）

次に鑿付石鍋に関しては、森田・杉原による型式分類と編年において、今のところ異論や対案は出ていない様であるが、その初現については、前述のように、森田・杉原・徳永では見解が異なる。すなわち森田は、11世紀後半、杉原は「11世紀後半は可能性」として、確実なのは12世紀前半とする。徳永も出現は杉原と同じく12世紀前半とするが、12世紀初頭まで遡るかは不明としている。

発掘調査で出土する滑石製石鍋の大半は破片であるため、現場担当者の型式認定にあたっては、初期滑石製石鍋に限れば、耳の形状に着目した徳永分類の方が使いやすいと言える。ただし、徳永も耳付石鍋の細分や器形全体を復元した型式組列、さらにその編年までは提示していない。

2 本県本土部の古代・中世土師器研究

ここからは本県大村市竹松遺跡の遺構から出土した初期滑石製石鍋を検討するが、その前に遺構の時期決定には土師器の編年が不可欠であるため、本県本土部の土師器研究を簡潔に整理しておく。長崎県の古代から中世にかけての土師器の編年研究は当該期の集落遺跡の調査に恵まれなかったことにより中々進展しなかった。他地域に比べて貿易陶磁の出土量が多いという状況も手伝って、発掘調査現場などでは、貿易陶磁の大宰府編年を援用することによって遺構の時期決定が行われるのが現状であった。

そのような中、柴田 亮は2019年（令和元年）に「肥前西部地域における中世土師器の編年試案」を発表し、当地の10世紀中頃から13世紀前半の土師器の編年研究を前進させた（第5、6図）（柴田2019b）。柴田の編年は従来、坏や小皿の口径・底径・器高の3つの属性を2つずつ対比させ、属性ごとの相関を比較検討することによって型式を設定していたのに対し、3つの属性を同一グラフ上に視覚化して検討するという、これまで前例がない独自の分析方法を用いている点が独創的であり特筆される。

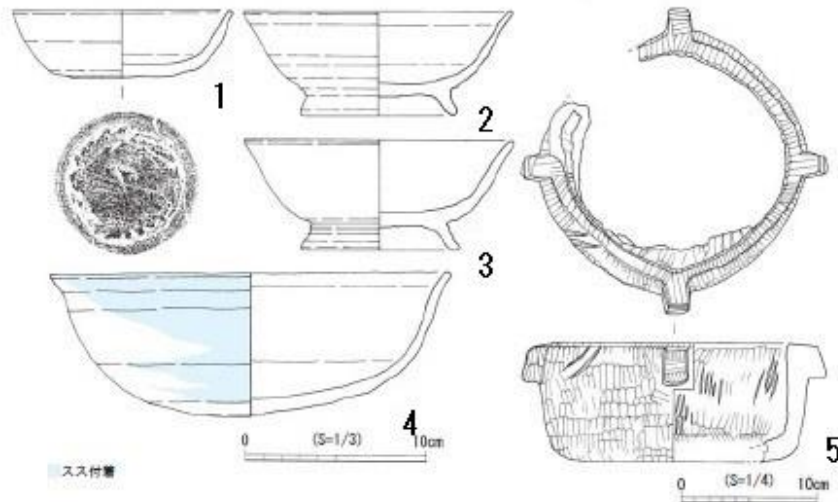
3 竹松遺跡出土の初期滑石製石鍋

ここからは九州新幹線西九州ルートの新築工事に係る車両基地建設に伴う大村市竹松遺跡の調査成果を基に初期滑石製石鍋の出現期を検討する。

(1) 竹松遺跡での初期滑石製石鍋の初現を示す遺物群

竹松遺跡で検出された遺構から出土した滑石製石鍋のうち最も古い時期のものはTAK201405③調査区の土坑SK30より出土した耳付石鍋である（第7図の5）（註4）。石鍋の型式は森田・杉原分類のA-2類、小形だが徳永分類の張耳型であろう。共伴遺物はいずれも土師器で坏1、椀2、鍋1である。報告書ではこれらの遺物の時期を10世紀前半としている（長崎県教委編2017）。土師器がほぼ完形を保っていること、小型の石鍋の底部が抜かれており明器化していることなどから筆者は、意図的な埋納の結果と判断し、土坑SK30出土資料の一括性や同時性は担保されていると考える。

共伴遺物のうち1の土師器坏は柴田分類のI-1類で、1期の指標となる土器とされ、実年代は10世紀中頃以前という（柴田2019b）。2、3の土師器椀は県内資料による編年ができていない現状であるので、大宰府土器型式を援用し参考にするとⅧ期の資料に類似する。実年代は9世紀末から10世紀前葉である。したがって土師器坏と土師器椀の存続時期から両者が共存する時期を9世紀



第7図 TAK201405③調査区SK30出土遺物（長崎県教委編2017）

第1表 竹松遺跡の9世紀の建物跡（長崎県教委編2020より）

(1) 竪穴建物跡(S C)

No	遺構名	調査区		遺構番号	掲載報告書	掲載頁	時期				備考
		大調査区	小調査区				既報告書	牛頭編年	大宰府土器型式	大宰府磁器区分	
1	竪穴建物跡	TAK201202	②	SC1	II	143	古代	—	—	—	—
2	竪穴建物跡	TAK201202	⑤	SC3	II	143	9世紀後半	—	VII	—	—
3	竪穴建物跡	TAK201202	⑤	SC4	II	148	9世紀後半	—	VII	—	カマド付設
4	竪穴建物跡	TAK201202	⑤	SC5	II	151	9世紀代	—	VI・VII	—	カマド付設
5	竪穴建物跡	TAK201202	⑤	SC 6	II	155	8世紀末～9世紀初頭	—	V	—	—
6	竪穴建物跡	TAK201202	⑤	SC 7	II	156	9世紀後半	—	—	—	—
7	竪穴建物跡	TAK201202	⑤	SC 8	II	157	8世紀後半～9世紀前半	—	VII	—	—
8	竪穴建物跡	TAK201405	⑤	SC2	IV下巻	13	—	—	—	—	カマド付設
9	竪穴建物跡	TAK201405	⑤	SC3	IV下巻	15	9世紀後半	—	—	—	カマド付設
10	竪穴建物跡	TAK201405	⑤	SC4	IV下巻	17	—	—	—	—	カマド付設

(2) 掘立柱建物跡(S B)※四面廂建物を除く

No	遺構名	調査区		遺構番号	掲載報告書	掲載頁	時期				備考
		大調査区	小調査区				既報告書	牛頭編年	大宰府土器型式	大宰府磁器区分	
1	掘立柱建物	TAK201302	④	SB01	III	364	—	—	—	—	—
2	掘立柱建物	TAK201302	⑤	SB02	III	366	8世紀後半から9世紀前半	—	—	—	—
3	掘立柱建物	TAK201302	⑤	SB03	III	367	—	—	—	—	—
4	掘立柱建物	TAK201302	⑤	SB04	III	368	8世紀後半から9世紀前半	—	—	—	—
5	掘立柱建物	TAK201302	⑨	SB06	III	371	—	—	—	—	—
6	掘立柱建物	TAK201302	⑩	SB07	III	372	古代	—	—	—	—
7	掘立柱建物	TAK201405	④	SB6	IV下巻	8	古代	—	—	—	—
8	掘立柱建物	TAK201407	④	SB4	IV下巻	8	—	—	—	—	—
9	掘立柱建物	TAK201407	④	SB6	IV下巻	12	—	—	—	—	—
10	掘立柱建物	TAK201506	③	SB3	V	275	古代	—	—	—	—

末から10世紀前葉に置くことができる。以上のことから竹松遺跡では9世紀末から10世紀前葉には初期滑石製石鍋のうちの耳付石鍋が出現していた可能性が高い。

(2) 竹松遺跡における初期滑石製石鍋の上限

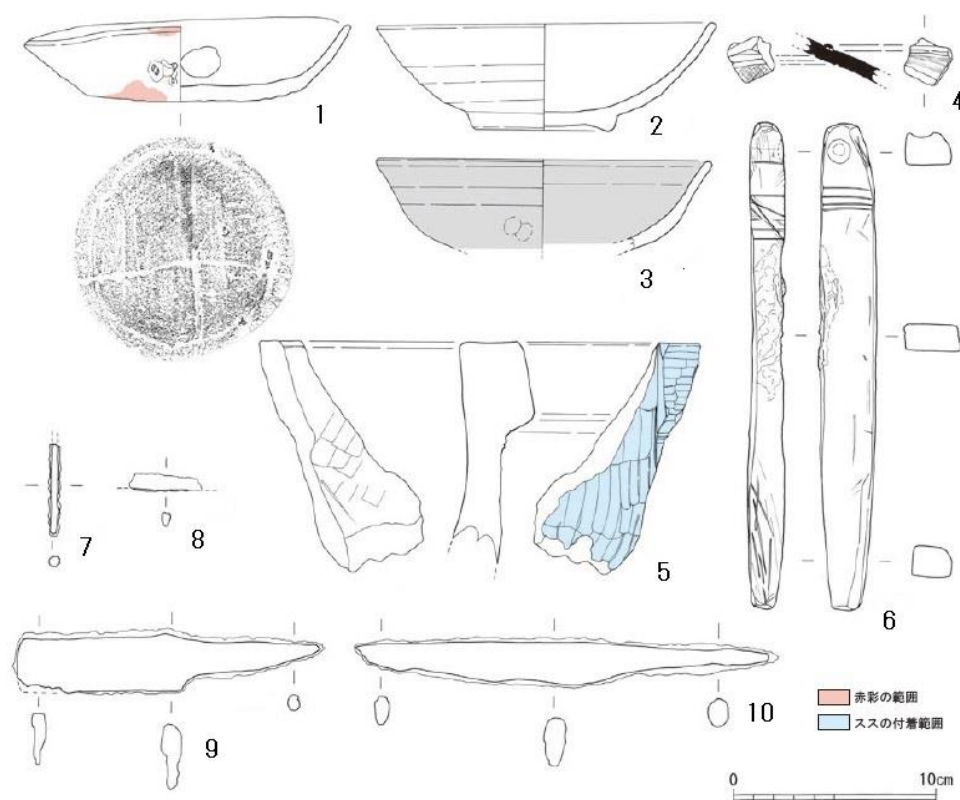
先に9世紀末から10世紀前葉とした土坑SK30出土遺物群より古い時期に竹松遺跡で初期滑石製石鍋が出土していないか改めて確認する。竹松遺跡で9世紀代とされた遺構を第1表に示した。これら竹松遺跡の9世紀の建物跡からは滑石製石鍋は出土していない。唯一TAK201202⑤調査区の竪

穴建物 SC5 から滑石製品が出土しているが、容器状の底部で、石鍋とは外観が異なる。建物跡以外の土坑などからの出土もない。したがって繰り返すが竹松遺跡では9世紀代には滑石製石鍋が出現していない可能性が高い。ただし、先述の TAK201405③調査区の土坑 SK30 出土遺物群の時期の上限が9世紀末であるため、この9世紀末に初期滑石製石鍋が出現していた可能性は残る。

(3) 耳付石鍋の消滅の問題

前項までは竹松遺跡における初期滑石製石鍋の出現時期を検討したが、次に初期滑石製石鍋である耳付石鍋の竹松遺跡での消滅の時期を検討する。

竹松遺跡で検出された遺構から出土した耳付石鍋のうち最も新しい時期のものは TAK201202⑤調査区の土坑墓 ST2 から出土したものである (第8図5) (長崎県教委編 2017)。



第8図 TAK201202⑤調査区 土坑墓 ST2 出土遺物 (長崎県教委編 2017)

土坑墓 ST2 は長軸 1.6 m、短軸 1.1 m の隅丸方形の墓坑をもち、埋土に焼土粒や炭化物を含んでいた。

共伴遺物は 1 の土師器坏、2 の瓦器碗、3 の黒色土器碗 B 類、4 の須恵器壺片、5 の耳付石鍋片、6 の砥石、7~10 の不明鉄製品、11 の刀子である。

土坑墓であるため、これらの遺物の一括性は高いと判断できる。1 の土師器坏は柴田分類の III 類で柴田編年 3 期の指標土器であり、12 世紀後半とされる。3 の黒色土器碗 B 類や柴田分類の II 類瓦器碗 (柴田 2019) が共伴するところから、ここでは 12 世紀後葉としたい。以上の検討から竹松遺跡では 12 世紀後葉まで耳付石鍋が残ることが考えられる。

4 竹松遺跡出土の鍔付石鍋

(1) 竹松遺跡での鍔付石鍋の出現

次に耳付石鍋に後続する鍔付石鍋の竹松遺跡での出現時期を検討する。

竹松遺跡で検出された遺構から出土した鍔付石鍋のうち最も古い時期のものはTAK291202①調査区のSK16より出土した資料である(第9図の6)

(長崎県教委編 2017)。

土坑の下部に円礫が密に集積しており、上部には土器片や炭化物が見られることから筆者は人為的な集石遺構と考え、SK16 出土資料の一括性や同時性は担保されていると判断した。出土した土師器小皿(第9図2)は柴田編年3期の指標遺物でもある。

共伴した遺物は、1の豊前型土師器坏、2の土師器小皿、3の瓦器小皿、4の白磁皿VI類、5の白磁碗IV類である。7は滑石製品の二次加工品、8は不明鉄器である。土師器小皿は柴田分類のII-3類で3期、貿易陶磁は大宰府編年C期である。したがって実年代は12世紀中頃とすることができる。

以上のことから竹松遺跡では12世紀中頃には既に鍔付石鍋が出現していた可能性が高い。

(2) 竹松遺跡のTAK201504のB調査区の調査成果(長崎県教委編 2019)

このように竹松遺跡で12世紀中頃には鍔付石鍋が出現していた可能性が高いことを踏まえ、その初現はいつかという問題を検討したい。

竹松遺跡での鍔付石鍋の初現を考えるうえで参考になるのが都市計画道路池田沖田線の建設に伴って調査された竹松遺跡のTAK201504のB調査区の調査成果である。同調査区からは掘立柱建物跡(略号:SB)8棟、竪穴建物(略号:SC)跡4軒、塀(略号:SA)跡1、不明遺構(略号: SX)3、柱穴(略号: SP)などが検出された。

ここでは各遺構から出土した土師器を柴田編年に基づいて再検討する。

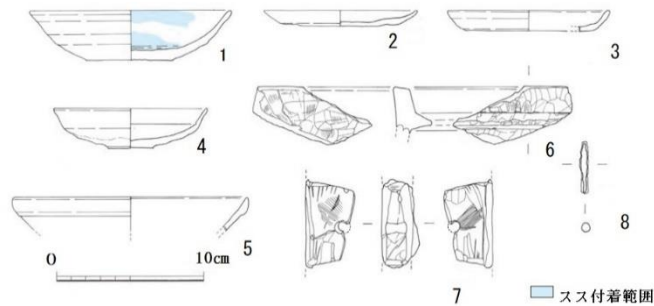
①塀SA1

異なる柱穴より同型式の土師器小皿2点が出土している。残存率が高いものは9.0センチ×7.0センチ×1.2センチで、低いものは9.1センチ×6.8センチ×1.0センチでほとんど変わらない。いずれも底部は回転ヘラ切り離しである。柴田分類II-2類、3期で、実年代は12世紀初頭である。

②掘立柱建物跡SB1

異なる柱穴から在地の土師器小皿2点が出土している。8.2センチ×6.4センチ×1.2センチと8.8センチ×6.8センチ×1.1センチであるが、共に残存率が低く、器形から判断して図上復元の口径はもう少し長くなると思われる。底部は回転ヘラ切り離しである。器高や底径、形状からみて柴田分類II-2類、3期で12世紀初頭と判断した。

③竪穴建物SC1



第9図 TAK201202①調査区SK16出土遺物(長崎県教委編 2017)

竪穴建物跡の覆土から4点の土師器小皿が出土している。残存率が低く、図上復元が難しいが、器高が異なる3型式の小皿とみた。器高が高いものから順に柴田分類のⅡ-1類、Ⅱ-2類、Ⅱ-3類と判断した。したがって2期(11世紀中頃から後半)、3期(12世紀初頭)、同3期(12世紀後半)の実年代が与えられるが、時間幅が大きい。

④土坑SK2

柴田編年で3期の指標となる土師器小皿を出土した遺構である。実年代は12世紀後半となる。

⑤不明遺構SX1

柴田編年で3期の指標となる土師器小皿を出土した遺構である。実年代は12世紀初頭となる。

⑥柱穴SP5、同117

SP5の土師器小皿は残存率が低く十分な検討ができない。比較的残存率が高いSP117出土の土師器小皿は8.2㍍×6.0㍍×1.1㍍で底部は回転ヘラ切り離しである。図上復元口径はもう少し長くなると思われ、柴田分類のⅡ-2類で、3期である。実年代は12世紀初頭となる。

以上、竹松遺跡のTAK201504のB調査区の遺構出土の土師器小皿の検討結果からこれらの遺構は3期に分かれる可能性が高い。すなわち①11世紀中頃から後半、②12世紀初頭、そして③12世紀後半である。発掘調査報告書では、当遺跡の遺構群を3期に分けているが、おおよそそれに対応すると考える。

このTAK201504のB調査区では鍔付石鍋が出土していない。しかし上記3時期のうち、③の12世紀後半に関しては前述の通り車両基地建設に伴う竹松遺跡の調査で12世紀中頃には既に存在していることが分かっているので検討対象から除かれるため、竹松遺跡の場合②の12世紀初頭には鍔付石鍋がまだ出現していない可能性が高い。したがって同遺跡での鍔付石鍋の出現は前述の通り12世紀中頃となる。

6 竹松遺跡での滑石製石鍋の年代

以上のような竹松遺跡の調査成果から得られた滑石製石鍋の各型式の出現時期や消滅時期を整理したい。

徳永貞紹は初期滑石製石鍋が大宰府から福岡平野の沿岸地域に「遅くとも9世紀末から10世紀前葉には存在し、初現は9世紀後半に遡る可能性が高い」と指摘している(徳永前掲 p.728)。これまで検討してきたように竹松遺跡では初期滑石製石鍋のうち「出現期の石鍋」が出土していない。「出現期の石鍋」の分布が大宰府から福岡平野の沿岸部に限定されることを受けて徳永は「滑石製石鍋が出現した段階において西彼杵半島での集中的な生産体制がまだ確立しておらず、福岡平野周辺で滑石製石鍋の生産が開始された可能性もある」(徳永前掲 p.733)との見解を披歴しているので、竹松遺跡に「出現期の石鍋」が見られない事実は徳永説を裏付けるものかもしれない。

また徳永は「張耳型」の石鍋が9世紀後半から10世紀代を中心とする時期であると述べているが、竹松遺跡では「張耳型」が9世紀末から10世紀前葉に出現しており、それを遡る9世紀代の遺構からは「張耳型」の石鍋は出土していない。この点は「張耳型」の上限を9世紀後半とする徳永説とは一致しない(註5)。

次に耳付石鍋の消滅の問題であるが、竹松遺跡では12世紀後葉までは残るようで、同時期に耳付石鍋が消滅すると考える徳永の見解とは一致せず、12世紀後半頃まで流通するという松尾の見解を支持する結果となった。

さらに鏝付石鍋について徳永は12世紀前半には出現するが、12世紀初頭に出現していたかは不明としている。竹松遺跡では12世紀中頃には存在しているものの、12世紀初頭には出現していない。このことは12世紀初頭に鏝付石鍋が出現していたかは不明とした徳永の見解を補う事実と言えよう

なお、鏝付石鍋の消滅については竹松遺跡の盛期が13世紀までであるため、資料的制約から検討できなかった。

以上のように生産地に最も近い消費地として竹松遺跡での滑石製石鍋の出現や消滅時期を検討してきたが、耳付石鍋の出現は9世紀末から10世紀前葉で、その後12世紀後葉まで残存し、13世紀前後に消滅することが想定された。

一方、鏝付石鍋の出現は12世紀中頃であることが分かったものの消滅時期は竹松遺跡の盛期が13世紀までであるので十分な検討ができなかった。

以上の結果を先行研究に照らすと細部で一致しない点があるものの、ほぼ徳永の学説に沿っていると評価することができる。

本稿を執筆するにあたり、川畑敏則、柴田 亮、松尾秀昭の各氏には構想段階から指導・助言をいただいた。末筆ながら芳名を記し感謝したい。

(令和4年7月14日 脱稿)

【註】

註1 川畑敏則の研究などがある(川畑2022)。

註2 この「9世紀末頃」の実年代の根拠となった考古資料は、筑前国分寺推定僧房跡(福岡県太宰府市)の土坑出土遺物および竹戸遺跡(福岡県糸島市)の土坑(SK1)出土遺物であるが、徳永貞紹によると両遺跡出土の「石鍋が未報告のままであることが、滑石製石鍋の出現年代をめぐる意見の相違が生じた背景の一つにあると考えられる。」と指摘している(徳永2010 p. 728)。杉原敏之も「筑前国分寺例の詳細は不明」と徳永と同様の指摘をしている(杉原2007 p. 135)。

註3 徳永はこの「出現期の石鍋」と「張耳型」「小耳形」「長耳型」を合わせて「耳付石鍋」と呼んでいる。

註4 TAKは竹松遺跡の略号で2014は調査年、05は大調査区、③は小調査区を示す。

註5 徳永の論攷では「張耳型」の上限が9世紀末と読める箇所もあるので、仮にそうであれば竹松遺跡の調査成果との齟齬はない。

【引用・参考文献】

川畑敏則2022「石鍋加工品にみられる加工技術の総体—長崎県大村市竹松遺跡出土の事例から—」長崎県埋蔵文化財センター紀要第12号 長崎県教育委員会

柴田 亮2019a「島原半島出土瓦器碗考」『先史学・考古学論究』VII 考古学研究室創設45周年記念論文集 龍田考古会

柴田 亮2019b「肥前西部地域における中世土師器の編年試案」『中近世土器の基礎研究』27 日本中世土器研究会

- 杉原敏之 2007 「観世音寺出土の滑石製石鍋」『観世音寺. 考察編』九州歴史資料館
- 徳永貞紹 2010 「初期滑石製石鍋考」先史学・考古学論究V 甲元眞之先生退任記念 龍田考古会
- 長崎県教委編 2017 『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2019 『竹松遺跡』長崎県文化財調査報告書第217集 長崎県教育委員会
- 長崎県教委編 2020 『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第12集 長崎県教育委員会
- 松尾秀昭 2011 「縦耳型石鍋の時期—長崎県内における資料を中心に—」『別府大学文化財学論集Ⅰ』後藤宗俊先生古
希記念 後藤宗俊先生古希記念論集刊行会
- 松尾秀昭 2017 『石鍋が語る中世 ホゲット石鍋製作遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」
- 森田 勉 1983 「滑石製容器—特に石鍋を中心として—」『仏教藝術』148号 毎日新聞